

第5回特別展

# 吉田格 縄文文化研究の業績

～吉田格コレクション～



立正大学博物館

# ごあいさつ

立正大学博物館の貴重な収蔵資料として“吉田格コレクション”があります。吉田格氏は、昭和13(1938)年立正大学専門部歴史地理科に入学され、昭和16(1941)年操上卒業されております。昭和17(1942)年には歩兵第42・鳥取連隊入隊、昭和21(1946)年山口県仙崎港に帰還し除隊されております。同年9月に日本考古学研究所研究員となり、各地の縄文時代遺跡の発掘調査を行われました。中でも、茨城県花輪台貝塚、神奈川県称名寺貝塚の調査は大きな成果を挙げ、現在いずれも縄文時代早期と後期の標式遺跡として知られています。その後も考古学界に様々なご尽力をされ、平成18年3月に逝去されました。

今回、新たに吉田格氏の資料(写真・図版・書籍など)の寄贈を受け、改めて吉田先生の業績を振り返り、関連資料の展示をします。特に基準資料である花輪台貝塚、称名寺貝塚出土の資料を中心に展示します。

平成20年11月

館長 池上 悟

## 目次

### ごあいさつ

1. 吉田格略歴と吉田格コレクション
2. 「吉田格コレクション」資料出土遺跡一覧
3. 「吉田格コレクション」資料
4. 縄文時代編年表・吉田格氏略年譜

### 凡例

1. 本図録は、平成20(2008)年11月1日(土)～11月29日(土)にかけて開催する第5回特別展「吉田格 縄文文化研究の業績～吉田格コレクション～」の展示図録として作成した。
2. 本図録の編集・作成は、館長池上悟の指示により内田勇樹(博物館学芸員)が行った。
3. 展示資料・写真については以下の個人に協力を得た。  
吉田道子・坂詰秀一・金子直行・上野真由美
4. 企画展開催にあたって、特に参考にした文献は以下の文献である。

・「横浜市篠原町表谷東貝塚に就て諸磯式の住居址発掘」『考古学雑誌』第29巻第8号 昭和14年  
・「埼玉縣石神貝塚調査」『人類学雑誌』第55巻第11号 昭和15年  
・「茨城県花輪台貝塚概報」『日本考古学』第1巻第1号 昭和23年  
・『花輪台式文化』山岡書店 昭和24年  
・『東京近郊石器時代遺跡案内』武蔵野文化協会昭和25年  
・「千葉県横橋貝塚」『考古学ノート』第5号 昭和26年  
・『石器時代の文化(縄文土器と石器の話)』さ・え・ら書房昭和27年  
・『武蔵野の石器時代』武蔵野文化協会昭和30年  
・「千葉城ノ台貝塚」『石器時代』昭和30年  
・『横浜市称名寺貝塚発掘調査報告』東京都武蔵野郷土館昭和35年

・「東京都板橋区赤塚城址貝塚調査報告-東京都内に於ける貝塚の研究」3『武蔵野』第41巻第1号 昭和36年  
・「横浜市称名寺D貝塚調査概報」『武蔵野』第47巻第2・3号昭和43年  
・「東京都大田区下沼部貝塚出土の晩期縄文土器」『石器時代』第9号 昭和44年  
・『関東の石器時代』雄山閣昭和48年  
・「称名寺1貝塚発掘調査報告」昭和59年  
・「縄文早期花輪台式文化」『考古学叢考』下巻 昭和63年  
・「吉田 格コレクション 考古資料図録」立正大学学園 平成2年  
・戸沢光則編『縄文時代研究事典』東京堂出版 平成6年  
・小林達雄編著『総覧 縄文土器』アム・プロモーション 平成20年

## 1 吉田格コレクション

「吉田格コレクション」は、吉田格氏が直接手掛けてきた膨大な発掘資料を、ご自身の出身校でもある立正大学に寄贈して頂いた縄文時代を中心とした貴重な資料です。

なかでも、花輪台貝塚・称名寺貝塚の出土資料は吉田格氏によって設定された標識土器（花輪台式土器（縄文時代早期）・称名寺式土器（縄文時代後期））として学界に周知されている資料であります。

吉田格氏は、昭和13(1938)年立正大学専門部歴史地理学科に入学され、昭和16年12月繰上卒業、昭和17年2月歩兵第42・鳥取連隊に応召、昭和21年4月山口県仙崎港に帰還・除隊し、同年9月日本考古学研究所研究員となります。その後、武蔵野博物館、東京都立武蔵野郷土館に勤務され、一貫して縄文時代・先土器時代の研究をされてき



ジェラード・グロード師と  
(昭和22年秋 左よりG・グロード師・江坂輝彌氏・信者・吉田格氏 撮影：芹沢長介氏)



東京都国分寺市多喜窪  
遺跡調査の宿舎にて  
(昭和24年8月)

ました。また、その間にも立正大学・東京学芸大学にて教鞭をとられ、多くの学生たちの指導にあたられました。

「吉田格コレクション」は、立正大学の一つの学術的資産として、そして“立正考古”の研究と教育の資料として、ご提供して頂いたものです。

本年度に、これまでの資料に加え、吉田格氏所蔵の写真・図版・書籍などをご遺族の方から寄贈を受けました。今回改めて吉田格氏の業績を紹介していきたいと思います。



吉田格先生近影



茨城県立木貝塚の調査  
(昭和26年秋 右上吉田格氏)



板橋区四枚畑貝塚の調査  
(昭和13年冬 前列中央後藤守一先生・同右端江坂輝彌氏・後列右から八幡一郎氏・日本大学大友氏・吉田格氏・桑山龍迫氏)

## 2 「吉田格コレクション」資料出土遺跡一覧

### 関東地方

1. 東光台遺跡 [ 栃木県足利市 ]
2. 貝柄山貝塚 [ 茨城県常総市花島町貝柄山 ]
3. 築地貝塚 [ 茨城県常総市大輪字築地 ]
4. 花輪台貝塚 [ 茨城県北相馬郡利根町早尾 ]
5. 立木貝塚 [ 茨城県北相馬郡利根町立木 ]
6. 福田貝塚 [ 茨城県稲敷市福田 ]
7. 城ノ台北貝塚 [ 千葉県香取市小見川城ノ台 ]
8. 新田山遺跡 [ 千葉県千葉市坂月町新田山 ]
9. 犢橋貝塚 [ 千葉県千葉市花見川区さつきが丘 ]
10. 幸田貝塚 [ 千葉県松戸市幸田 ]
11. 堀之内貝塚 [ 千葉県市川市堀之内 ]
12. 石神貝塚 [ 埼玉県川口市石神 ]
13. 大原遺跡 [ 埼玉県川口市大字安行吉岡字大原 ]
14. 新郷貝塚 [ 埼玉県川口市大字東貝塚 ]
15. 赤塚城址貝塚 [ 東京都板橋区赤塚 5 丁目 ]
16. 熊ノ郷遺跡 [ 東京都国分寺市西恋ヶ窪 3・4 丁目 ]
17. 回田 ( 鈴木 ) 遺跡 [ 東京都小平市鈴木町 1 丁目、回田町、御幸町 ]
18. 多喜窪遺跡 [ 東京都国分寺市西元町 2・4 丁目 ]
19. 殿ヶ谷戸遺跡 [ 東京都国分寺市南町 2 丁目 1～10 付近 ]
20. 西之台 B 遺跡 [ 東京都小金井市中町 4 丁目 14 ]
21. 武蔵関駅北方遺跡 [ 東京都練馬区関町北 4 丁目 ]
22. 井草遺跡 [ 東京都杉並区上井草 4 丁目 12～19 ]
23. 仲町 2 丁目遺跡 [ 東京都練馬区永台 2 丁目仲町 ]
24. 庄仙遺跡 [ 東京都大田区久ヶ原 1 丁目～北峰町 ]
25. 下沼部貝塚 [ 東京都大田区田園調布本町 37～39 ]
26. 六所東貝塚 [ 東京都世田谷区野毛 2・3 丁目、上野毛 1 丁目 ]



- 27. 十三菩提遺跡 [ 神奈川県川崎市宮前区野川 ]
- 28. 子母口遺跡 [ 神奈川県川崎市高津区子母口 54-148 ]
- 29. 菊名貝塚 [ 神奈川県横浜市港北区菊名字宮谷 ]
- 30. 表谷東貝塚 [ 神奈川県横浜市港北区篠原北1丁目 ]
- 31. 桂台遺跡 [ 神奈川県横浜市栄区公田町 ]
- 32. 称名寺A・B貝塚 [ 神奈川県横浜市金沢区金沢町 206・寺前町 133 ]
- 33. 野島貝塚 [ 神奈川県横浜市磯子区野島 470-2 ]
- 34. 三戸遺跡 [ 神奈川県三浦市初声町三戸上ノ原 ]
- 35. 中屋敷遺跡 [ 神奈川県足柄上郡大井町大字山田 ]
- 36. 峠遺跡 [ 静岡県加茂郡東伊豆町奈良本峠 1244 他 ]



### 東北地方

- 37. オセドウ貝塚 [ 青森県五所川原市相内露草 ]
- 38. 亀ヶ岡遺跡 [ 青森県つがる市木造亀ヶ岡 ]
- 39. 日計遺跡 [ 青森県八戸市河原木字日計 ]
- 40. 貝取貝塚 [ 岩手県一関市花泉町油島字貝取 ]
- 41. 白浜貝塚 [ 岩手県一関市花泉町涌津字白浜 ]



### 山陰地方

- 42. 佐太講武貝塚 [ 島根県松江市鹿島町佐太宮内・名分 ]
- 43. サルガ鼻洞窟遺跡 [ 島根県松江市美保関町森山崎ヶ鼻 ]

### 3 「吉田格コレクション」資料

#### 1 花輪台貝塚【茨城県北相馬郡利根町早尾】

花輪台貝塚は、小貝川が利根川に合流する河口付近の左岸の台地上に所在します。当貝塚より東約 2.2km に立木貝塚が所在します。

昭和 21 年 9 月に日本考古学研究所が開設され、第 1 次調査として花輪台 A 貝塚（第 1 号竪穴住居跡）が調査されました。第 1 次調査の資料は、所長のジェラード・グロード神父の帰国にともなって南山大学に寄贈されました。昭和 23 年 11 月から 12 月にかけて第 2 次調査が行われ、4 軒の竪穴住居跡と 1 軒の竪穴状遺構が発見されました。

第 2 次調査の結果、第 4 号住居跡を除く総ての竪穴住居跡の覆土中に貝層が確認されました。住居跡は、環状に構成され、出土土器より第 1・4 号→第 2・3 号→第 5 号住居跡の順に構築されたと考えられます。また、第 6 号竪穴状遺構を小型の住居ととらえると第 1・4 号と同時期になります。



花輪台貝塚位置図

吉田格氏は、住居跡ごとの土器の出土状況から、撚糸文と無文土器を多く出土する第 1・4・6 号住居跡出土の土器群を花輪台 I 式、無文と沈線文を多く出土する第 2・3・5 号住居跡の土器群を花輪台 II 式と設定しました。現在では、撚糸文系土器（第 I 様式から第 V 様式）のなかの第 5 様式として捉えられており、撚糸文系土器が各地域で様々な地方型式が出来た中の一つの型式として考えられ、花輪台式として下総台地中央部から茨城方面にかけての地域で発達した土器群として考えられています。



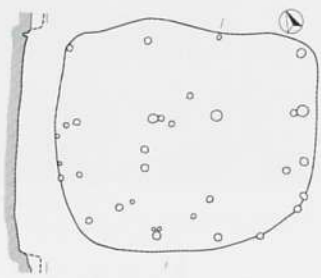
調査風景  
(第 2 次調査 (1948 年 12 月)、2・3・4・5 号住居跡全景。住居跡実測の岡本勇 (左) と市原寿文 (右) 氏。芹沢長介氏撮影。)



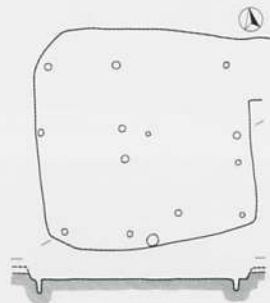
第 1 号住居跡全景



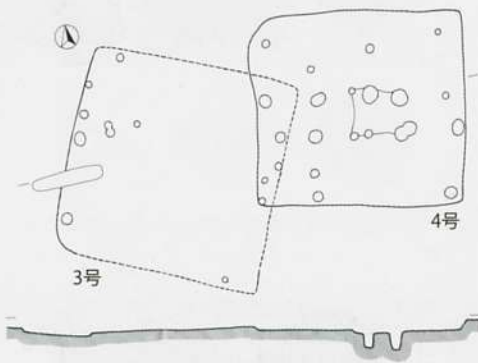
第 2 号住居跡内貝層出土状況



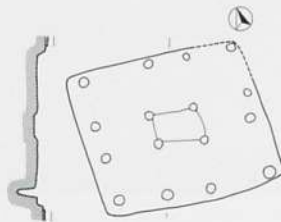
第1号住居跡



第2号住居跡



第3・4号住居跡



第5号住居跡



花輪台貝塚の竪穴住居跡の分布図及び実測図



第2号住居跡内貝層出土土器



第2号住居跡内貝層出土土器



第3号住居跡内貝層出土土器



第4号住居跡内貝層出土土器



第5号住居跡内貝層出土土器



花輪台貝塚出土動物形土偶(上段)・土製品(下段)



花輪台貝塚出土石鏃



花輪台貝塚出土磨製石斧



## 2 城ノ台北貝塚【千葉県香取市小見川城ノ台】

城ノ台北貝塚は、利根川下流域、河口部から約25km上流の右岸の台地縁辺部に位置します。貝塚は、舌状台地上の北と南に所在します。

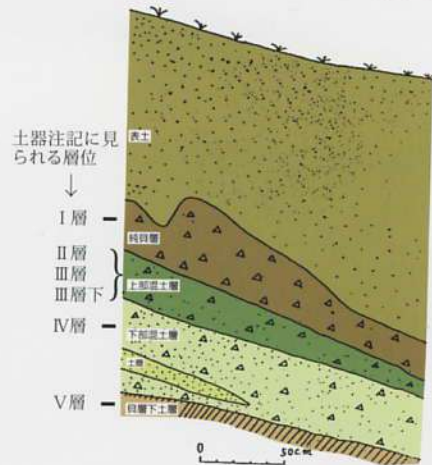
当貝塚は、全国的にも数少ない縄文時代早期の貝塚で、多くの研究者たちによって調査が行われています。吉田格氏は、昭和24年11月に第1回、昭和25年10月に第2回の調査を行い、1区から4区までの地点を調査しています。

その結果、上層の純貝層（I層）から子母口式土器、その下の上部混土貝層（II・III・III下層）から田戸上層式土器、下部混土貝層（IV層）から田戸下層式土器が出土し、田戸下層式→田戸上層式→子母口式土器の層位的編年を確認しました。この層位的事例は戦後の縄文時代早期における研究の指標となりました。

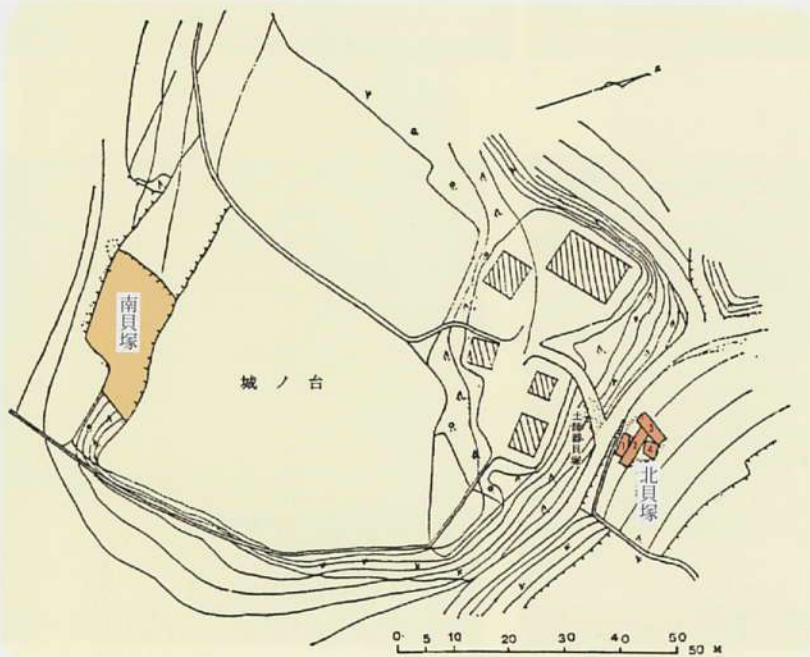
貝塚は、ハマグリを主体とする鹹水産の貝で構成され、獣骨はシカ・タヌキが多く出土しています。また、石器類はほとんど出土せず、敲石2点・磨石1点のみの出土です。



城ノ台北貝塚位置図



城ノ台北貝塚土層断面図  
〔『石器時代』第1号（昭和30年）より一部加筆転載〕



城ノ台北貝塚分布図  
〔『石器時代』第1号（昭和30年）より一部加筆転載〕



城ノ台北貝塚I層出土土器



城ノ台北貝塚第II層出土土器



城ノ台北貝塚第III層出土土器



城ノ台北貝塚第III層下出土土器



城ノ台北貝塚第IV層出土土器



城ノ台北貝塚第V層出土土器

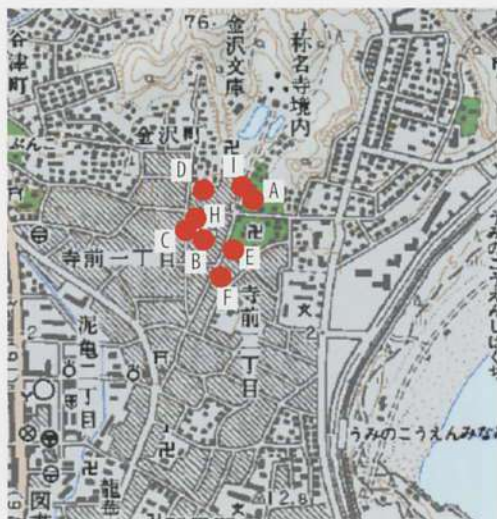
### 3 称名寺貝塚【神奈川県横浜市金沢区金沢町 206・寺前町 133】

称名寺貝塚は、神奈川県横浜市金沢区金沢町の称名寺境内及びその周辺に分布する貝塚で、A～Iの9箇所の貝塚群が調査されています。

吉田格氏は、昭和26年2月にA貝塚・B貝塚を、昭和32年9月にB貝塚・C貝塚・G貝塚（江戸時代）を、昭和41年3月にD貝塚を調査しています。

A・B貝塚は、昭和26年2月18日より6日間にわたり、日本考古学協会の縄文部会として発掘調査が行われ、昭和32年9月28日より10月2日にわたり武蔵野文化協会・東京都公園協会共催のもと第2次調査（B・C・G貝塚）が行われました。また、昭和41年3月4日より8日まで武蔵野文化協会・東京都公園協会共催でD貝塚の調査が行われました。

称名寺貝塚では、極めて多くの獣骨が出土し、特にイルカの骨などが多いです。また骨角器の銚・ヤス・釣針、土製錘などが多く出土していることから、漁撈が盛んに行われていたことが伺えます。



称名寺貝塚位置図



A貝塚調査風景



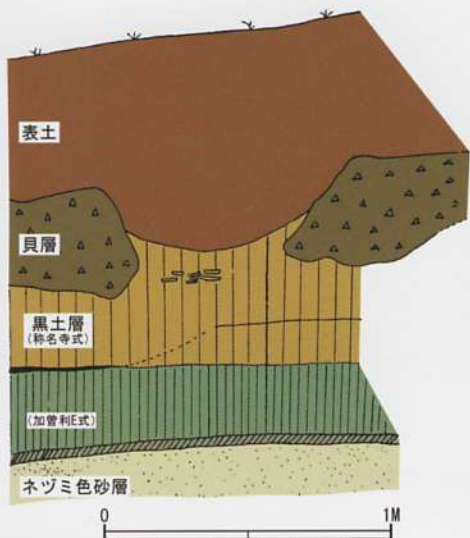
称名寺A貝塚B地区貝層断面



B貝塚調査風景

称名寺貝塚調査スナップ

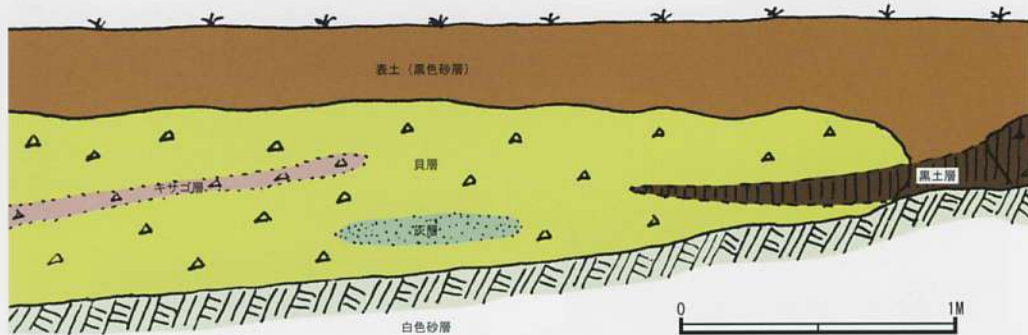
# 称名寺貝塚貝層断面図



称名寺 B 貝塚貝層断面写真

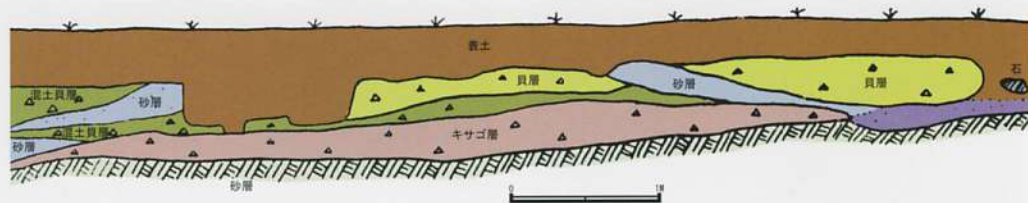
称名寺 A 貝塚貝層断面図

(『東京都武蔵野郷土館調査報告書 第1冊—横浜市称名寺貝塚—』(昭和35年)より一部加筆転載)



称名寺 B 貝塚貝層断面図

(『東京都武蔵野郷土館調査報告書 第1冊—横浜市称名寺貝塚—』(昭和35年)より一部加筆転載)



称名寺 C 貝塚貝層断面図

(『東京都武蔵野郷土館調査報告書 第1冊—横浜市称名寺貝塚—』(昭和35年)より一部加筆転載)

## 称名寺貝塚出土土器

称名寺貝塚出土土器は、昭和 35（1960）年吉田格によって、称名寺式土器として縄文時代後期初頭（B.C.2500 年ごろ）の土器群の基準土器として設定されました。

吉田格氏は、A 貝塚出土の太い沈線で弧線や S 字状の文様を描き磨消縄文を有する土器群を第 1 群、B 貝塚出土の磨消縄文の代わり

に刺突の列点や刻みを施す土器群を第 2 群とし、両者をまとめて称名寺式としました。

その特徴は、「J」字状や「S」字状の渦巻文を描くところにあります。

現在、称名寺式土器は細分され、I 式を 5 段階、II 式を 7 段階に細分されています。

### 称名寺A貝塚出土土器



深鉢土器  
(称名寺 I 式・器高 27.0cm)



深鉢土器  
(称名寺 I 式・器高 25.1cm)



深鉢土器  
(称名寺 I 式・器高 23.8cm)



浅鉢土器  
(称名寺 I 式・器高 29.5cm)



深鉢土器  
(称名寺 I 式・残存高 11.5.0cm)



深鉢土器  
(堀之内 II 式・器高 11.0cm)



深鉢土器  
(称名寺 I 式・残存高 22.5cm)



深鉢土器  
(称名寺 I 式・残存高 25.6cm)



深鉢土器破片（口縁部）  
(称名寺 I 式・残存高上 8.8cm/下 7.9cm)



深鉢土器  
(称名寺II式・器高 27.0cm)



深鉢土器  
(称名寺II式・器高 25.1cm)



深鉢土器  
(称名寺II式・器高 29.5cm)



深鉢土器  
(称名寺II式・器高 41.0cm)



深鉢土器  
(称名寺II式・器高 26.9cm)



深鉢土器  
(称名寺II式・器高 30.9cm)



深鉢土器  
(堀之内I式・器高 20.3cm)



深鉢土器  
(称名寺II式・器高 29.1cm)



浅鉢土器  
(堀之内I式・器高 14.3cm)



鉢形土器  
(称名寺II式・器高 27.5cm)

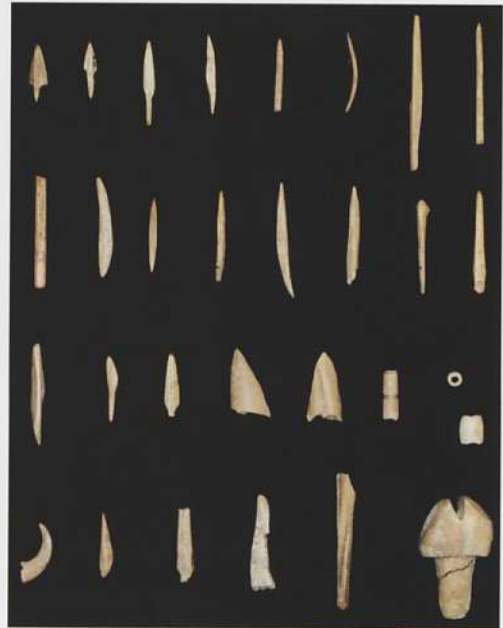


鉢形土器  
(称名寺II式・器高 15.0cm)

称名寺貝塚出土骨角器・貝輪・土器片錘



称名寺 B 貝塚出土骨角器



称名寺 B 貝塚出土骨角器



称名寺 B 貝塚出土骨角器



骨角器原材料



称名寺 B 貝塚出土  
土器片錘



称名寺 B 貝塚出土  
貝輪

#### 4 赤塚城址貝塚【東京都板橋区赤塚5丁目】

赤塚城址貝塚は、荒川溪谷の左岸、白子川谷の出口谷と赤塚東谷に挟まれた、標高25.0～27.5mの舌状台地の緩斜面に所在します。貝塚は、調査当時南側と西側の2箇所が確認されていましたが、西側はすでに乱掘されており、南側もすでに3分の1が発掘され残っていませんでした。

発掘調査は、昭和35年3月1日～5日にわたって行われました。調査の結果、縄文時代後期の加曾利B式～堀之内Ⅱ式土器を出土する貝塚であることが確認されました。

貝塚は、ハマグリ・ヤマトシジミを最も多く出土し、獣骨ではシカ・イノシシ・イヌが少量確認されただけでした。骨角器はヤス・牙玉が出土し、特に牙玉はイヌの犬歯を両側から穴を開けたもので、都内の貝塚例では珍しいものです。



赤塚城址貝塚位置図



赤塚城址貝塚出土遺物



深鉢土器  
(堀之内Ⅱ式・残存高 11.2cm)



注口土器  
(堀之内Ⅰ式・残存高 13.9cm)



深鉢土器  
(堀之内Ⅱ式・器高 22.5cm)



深鉢土器  
(堀之内Ⅰ式・器高 31.3cm)



深鉢土器  
(堀之内Ⅰ式・器高 31.4cm)





深鉢土器  
(加曾利BⅠ式・残存高 36.0cm)



壺形土器  
(堀之内Ⅰ式・器高さ 13.2cm)



深鉢土器  
(堀之内Ⅰ式・器高 29.4cm)



深鉢土器  
(堀之内Ⅰ式・器高 40.2cm)



深鉢土器  
(堀之内Ⅰ式・器高 46.8cm)

## 5 下沼部貝塚【東京都大田区田圃調布本町 37～39】

下沼部貝塚は、多摩川の左岸下流域の標高約 20.0m の舌状台地の台地上斜面に位置しています。南北に長い 160～190m の楕円形を呈する大貝塚です。

下沼部貝塚は、明治 26 (1893) 年 4 月、『人類学雑誌』第 8 卷第 85 号に井上喜久治・鳥居龍蔵が「貝塚七ヶ所の記」を発表したことにより、学界に知られる事になりました。その後、鳥居龍蔵・内山九三郎により「武蔵国荏原郡調布村旧下沼部貝塚」(『人類学雑誌』第 8 卷第 86 号) が発表され、獣骨が多量に出土する貝塚として報告しています。また明治時代の小説家、江見水陰(明治 2 年～昭和 9 年)の考古探検記『地底探検記』、考古学小説『三千年前』などに取り上げられます。

吉田格氏は、昭和 12 年ごろから下沼部貝塚を訪れ、昭和 16 年には日本古代文化学会縄文部会の主催として貝塚の西側 A 地点、貝塚北側の貝層の残存部分を B 地点として



下沼部貝塚位置図

調査を行っています。

調査の結果、A 地点は縄文時代晩期の安行Ⅲ c 式土器が、B 地点は縄文時代後期の加曽利 B 式・安行式、晩期の安行Ⅲ a・Ⅲ b 式土器・大洞 B-C 式土器が確認されました。

特に A 地点からは多量のイノシシの骨が出土しています。



下沼部貝塚調査風景



昭和 6 年頃の下沼部貝塚



下沼部貝塚土器出土状況



深鉢土器  
(安行III d 式・器高 40.0cm)



深鉢土器  
(安行III a 式・器高 27.3cm)



深鉢土器  
(安行III a 式・器高 20.8cm)



注口土器  
(安行III a 式・器高 18.5cm)



浅鉢土器  
(大洞 B-C 式・器高 9.0cm)



台付鉢  
(安行III a 式・残存高 11.7cm)



手燭形土器  
(残存高 3.7cm)



浅鉢土器  
(安行III d 式・器高 6.7cm)



石剣



土錘



耳環



土版

## 6 表谷東貝塚【神奈川県横浜市港北区篠原北1丁目】

表谷東貝塚は、鳥山川が鶴見川に合流する地点の右岸台地上に位置します。谷戸を挟んで北東約600mのところに菊名貝塚が所在します。

吉田格氏は、昭和14年1月に酒詰仲男・江坂輝彌氏等の協力を得て4日間にわたり調査を行いました。その結果、縄文時代前期の黒浜式より諸磯a式の移行期と考えられる竪穴住居跡1軒が検出されました。遺物は、多量の土器以外には黒曜石製石鏃1点、表採による軽石製浮子のみが出土しているだけです。土器は、羽状縄文が全面に施された黒浜式土器と、斜縄文・竹管文の施された諸磯a式土器が出土しています。

検出された住居跡は、4m四方の小型のもので、炉は東北側壁よりにあり、周溝は不



表谷東貝塚位置図

整形を呈し大小14本ある柱穴の半数が周溝内で見つかっています。また、柱穴の中に大型土器片が埋められた状態で検出され、柱の補強のためのものと考えられています。



深鉢土器  
(諸磯a式・残存高16.8cm)



深鉢土器  
(諸磯a式・残存高29.8cm)



深鉢土器  
(諸磯a式・残存高20.0cm)



深鉢土器  
(諸磯a式・残存高15.4cm)

## 7 犢橋貝塚【千葉県千葉市花見川区さつきが丘】

犢橋貝塚は、花見川左岸の支谷最奥部の台地上に位置します。遺跡の周辺は宅地造成によりほとんど旧地形が残されていませんが、犢橋貝塚貝層部分が昭和56年に国指定史跡となり、現在貝塚は遺跡公園として保存されています。

吉田格氏は、昭和22・23年に数回にわたり調査を行っています。その結果、縄文時代後期の堀之内Ⅱ式から晩期の安行Ⅲa式までの土器が検出されました。

貝塚は、オキアサリ・キサゴ・ハマグリを主とする主鹹貝塚で、30種類の貝類が確認されています。また、貝層下において堀之内式期の住居跡も検出されています。



犢橋貝塚位置図



弭形角製品



耳栓



土偶破片



注口土器  
(安行Ⅰ式・器高22.1cm)



深鉢土器  
(堀之内Ⅰ式・器高51.1cm)



深鉢土器  
(安行Ⅰ式・器高24.4cm)

## 8 伊藤圭介蒐集石器

我が国最初の理学博士にして本草学者として著名な伊藤圭介（1803～1902年）は、若くして本草学（主として薬用となる動植物・鉱物について研究する中国伝来の学問）を学び、その後長崎出島の医師であったドイツ人P.F.V.シーボルトに師事しました。

シーボルトは日本滞在中に、我が国に関する各種の参考資料を綴って報告していますが、伊藤圭介にも文政11（1828）年に「勾玉考」を起草させ、木内石亭の学説を紹介しています。

明治4年の文部省設置後、同6年に『日本産物志』の編集に従事し、明治9年には「美濃部」三冊が刊行されました。同書上巻

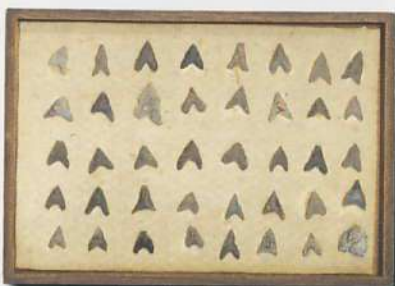
の鉱物部には、伊藤圭介蒐集の石器の挿図が4枚付載されています。

第1図には「雷斧 カミノノマサカリ 濃州諸村所出」として磨製石斧のさまざまな形態を示し、続く第2図では「雷斧 雷砧 出処同上 異志都々伊」として両頭石棒・有頭石棒をあげ、石刀として石製模造刀子を図示しています。第4図は「天狗之食匙」で「方言 濃州諸村所出」とあり、有舌尖頭器などの挿図が見られます。

このように『日本産物志』中にも紹介された石器類は、江戸時代の蒐人の保管を知る上でも学史上極めて重要な資料です。



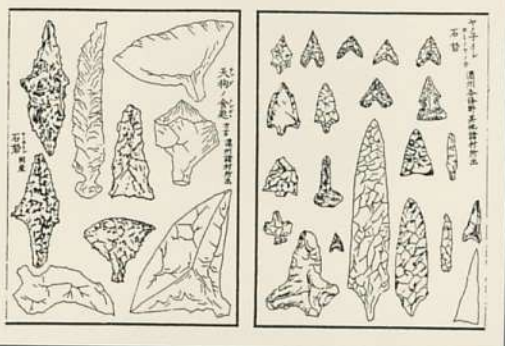
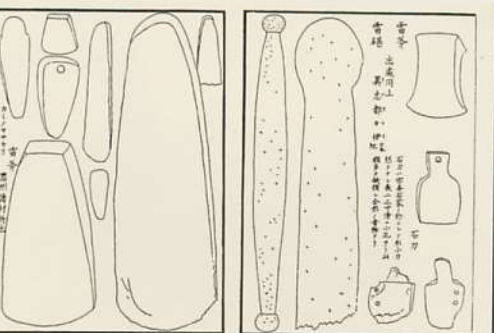
伊藤圭介蒐集石器  
(箱外形：縦15.8cm×横22.2cm)



伊藤圭介蒐集石器  
(箱外形：縦15.8cm×横22.2cm)



伊藤圭介蒐集石器  
(箱外形：左、縦15.6cm×横22.3cm  
右、縦22.3cm×横15.9cm)



『日本産物志』「美濃部」上巻鉱物部掲載の石器



伊藤圭介蒐集石器  
(箱外形：縦13.0cm×横22.9cm)

# 4 縄文時代土器編年表

## 東日本縄文土器編年表

西部	東部	南部	北部	陸北部	中部	東部	西部	東部	南部	東部	東北部	南部	東部	北東部	道南	道央	道東	道北	道庁	年代 (calBC)
出現土器群																				13000
縄起縄文系																				12000
瓜形文系 / 円孔文系																				11000
多縄文系																				10000
神楽文系 大川・神宮寺		尖底回転縄文系				籃糸文系				早期無文				神楽文系 日計				9000		
神楽文系 黄島		神楽文系 沢・穂沢 穂久保				前編式				貝殻・沈縄文系				貝殻沈縄文系平底				テンネル・透	8000	
神楽文系 高山寺 穂谷		貝殻・沈縄文系		高山寺 穂谷														7000		
采痕文系										采痕文系平底										6000
東海采痕文系		佐波 極楽寺		縄文采痕文系 (採痕在底文系)		東海采痕文系 / (採痕在底文系)		縄文采痕文系				縄文系平底				5000				
塩屋 木島		布目 新谷		塩屋 木島 中		塚田 中道		羽状縄文系				表館 早稲田6種 縄文采痕文系				5000				
清水ノ上Ⅱ 上の坊		北白川下層		有尾		有尾		前期大木				円筒下層				4000				
北白川下層		蛭ヶ森		諸磯		浮島 興津						北海道採痕文系				4000				
特殊凸帯文系		十三墓現																		3000
北裏C~ 北屋敷		勝坂		新保 新崎		勝坂 新巻 神崎		勝坂 新巻 神崎		阿玉台		中期大木				円筒上層				3000
中富 神明		曾利		上山田 天神山		火炎		唐草文		曾利		加曾利E		陸奥大木系				3000		
中津 福田KⅡ		大杉谷 串田新		沖ノ原		堀之内		堀之内		加曾利E		北筒				2000				
緑帯文		三仏生		加曾利B		宝ヶ峰		手稲								2000				
凹線文系		高井東		凹線文系		壺付		高井東		壺付		東三川Ⅰ・上ノ国				1000				
晩期半蘇竹管文 突帯文系		清水天王山		中屋		亀ヶ岡		佐野		清水天王山		天神原		晩期安行		亀ヶ岡		常舞		1000
浮線網状文系																常舞				1000
(弥生土器)																縄文時代以前				B.C. A.D.

※ ...吉田格氏設定標式土器  
(小林達雄編著『総覧 縄文土器』(アム・プロモーション 2008年8月)より一部加筆転載)



吉田格氏と道子夫人  
(平成4年度立正大学考古学会にて)

## 吉田格氏略年譜

大正9年3月3日	鳥取県八頭郡大伊村(現八頭町)大字下野464番地にて、吉田辰次・せつの次男として生まれる。
大正12年3月	東京府北豊島郡(現北区)滝野川町中里に転出
昭和7年3月	滝野川小学校卒業
4月	私立京華中学校入学
昭和12年3月	世田谷中学校卒業
昭和13年3月	立正大学専門部歴史地理科入学
昭和16年12月	立正大学歴史地理科・専門部操上卒業
昭和17年2月	応召。歩兵鳥取第42連隊入隊
昭和21年9月	日本考古学研究所研究員となる。
昭和23年4月	武蔵野郷土館設立に参画。武蔵野文化協会職員となる。
11月	日本考古学協会会員となる。
昭和26年7月	武蔵野文化協会考古学部会(旧)発足、代表となり、『考古学ノート』の刊行を開始。
昭和29年1月	武蔵野郷土館開館。武蔵野文化協会を退職し、同時に東京都より武蔵野郷土館非常勤調査員を委嘱される。
1月26日	後藤守一博士の媒酌により、小武道子と結婚。
昭和30年6月	『武蔵野の石器時代』が武蔵野文化協会より出版される。
昭和33年7月	東京都主事に任命される。
昭和43年4月	東京学芸大学教育学部講師を兼任する。
昭和45年4月	立正大学文学部講師を兼任する。(～昭和48年3月)
昭和46年7月	武蔵野文化協会考古学部会を再発足し、代表となる。
昭和48年3月	『関東の石器時代』が雄山閣から出版される。
昭和52年6月	武蔵野文化協会の理事となる。(～昭和63年6月)
昭和55年3月	還暦を迎え、東京都を退職。
4月	立正大学文学部講師となる。(～昭和62年3月)
5月	国分寺市文化財保護審議会委員および市史編纂委員を委嘱される。
9月	三鷹市文化財専門委員・調査団長に委嘱される。
10月	『吉田先生略年表 著作目録』が武蔵野文化協会考古学部会より刊行される。
昭和57年4月	目黒区文化財保護審議会委員を委嘱される。
昭和61年10月	東京都文化功労賞を授与される。
昭和63年7月	武蔵野文化協会の常任理事となる。
平成2年3月	『吉田 格コレクション～考古資料図録～』が立正大学学園より出版される。
平成4年10月	目黒区自治功労賞を授与される。
11月	『武蔵野の考古学～吉田格先生古稀記念論文集～』が吉田格先生古稀記念論文集刊行会より刊行される。
平成18年4月	逝去(享年86歳)

第5回特別展

### 吉田格の業績

—吉田格コレクション—

編集・発行 立正大学博物館

発行日 平成20年11月1日

〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉1700

TEL:048-536-6150/FAX:048-536-6170

E-mail:museum@ris.ac.jp

URL:http://www.ris.ac.jp/museum/